



TITLE:

<Book Review>Herbert C. Purnell, A Short Northern Thai-English Dictionary (Tai Yuan). Overseas Missionary Fellowship, Chiangmai, 1963,vi+125p

AUTHOR(S):

桂, 満希郎

---

CITATION:

桂, 満希郎. <Book Review>Herbert C. Purnell, A Short Northern Thai-English Dictionary (Tai Yuan). Overseas Missionary Fellowship, Chiangmai, 1963,vi+125p. 東南アジア研究 1965, 3(3): 205-205

ISSUE DATE:

1965-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55098>

RIGHT:

葉とは多少なりともちがっているということである。

(桂 満希郎)

Herbert C. Purnell: *A Short Northern Thai-English Dictionary (Tai Yuan)*. Overseas Missionary Fellowship, Chiang-mai. 1963. vi+125 p.

本書は先に述べた *Colorful Colloquial* と対を成すもので、タイ語北部方言の小型辞書である。あつかわれている方言は、やはりメーチャン (Mae chan) 地区のそれである。語彙の数は、ざっと計算して、1900 余りである。著者が1962年から1963年にかけて現地を集めたもので、単語の数そのものは余り多くないにもかかわらず、熟語の類がかなり多く取り入れられているのは便利である。大体に、このような方言を習得する場合、本当に困難なのは音素、声調、語彙などのちがいがよりも、むしろいろいろなイディオマティックな表現を身につけることだと思う。そういった意味で、巻末につけられた *Restricted Intensifiers* の項は非常に有益である。

バンコクのタイ語は全国の小学校で教えられており、かなりすみずみまで行きわたっているとはいえ、街から離れた村落や山地民の村などで仕事をする場合には、やはりその土地の方言でなければ仕事を進めることができない。こういった点を考えると、本書と先に述べた *Colorful Colloquial* を並用すれば、非常に効率よくこの方言を習得することができるであろう。

本文の前に、この方言の音素体系と表記法とを、チェンマイ方言および標準タイ語と対比しながら説明している。標準タイ語には5つ、チェンマイ方言には6つ、チェンライ方言には7つの声調を設定する。しかし、著者のいう High Long Fall, High Short Fall (音節末尾に閉鎖音を有する), High Short Fall (音節末尾に閉鎖音以外の子音を有する) は、相補的分布を成すから、これらをひとつにまとめて、全体としては、6つの声調を有すると解した方がより簡単に説明できるのではないかと思う。

語彙の数もまだ充分ではなく、意味にかんする説明にもややあいまいな点や取りちがえているのではないと思われる点もあるけれども、とにかくこの方言を習う際には、本書を手掛りとするのが一番よいであろう。

(桂 満希郎)

H. L. Shorto: *A Dictionary of Modern Spoken Mon*. Oxford Univ. Press, London, 1962. xvi+280 p.

われわれがその実態を十分に知ることができないような小言語についての辞書とか文法書などは、それが多少不正確なものであっても、少なくともそれ以外に利用しうるものがないという消極的な意味ではやはりそれなりの価値をもっているものである。モン語については R. Halliday: *A Mon-English Dictionary*. Bangkok, 1922. がその例であった。しかしその不完全さは別としても、この辞書は文語のそれであって、これによって現代モン語口語を知ることはいないのである。というのは、モン語では単に口語と文語の間に著しい隔たりがあるばかりでなく、文語の綴字と口語の音素形式を対応づける一定の規則すらないからである。ここにあげる Shorto 氏の辞書はまずこの点をはっきりさせて、本文をもっぱら口語の辞書とし、付録として個々の単語の綴字と音素形式との対応表を掲げている。このようにモン語の口語と文語とをはっきり区別したのは Shorto 氏が最初だと思う。

口語の辞書、とくに小言語の場合のように実用的な目的よりもむしろ言語学の専門的な目的をもった辞書においては、何よりもまず表記法の正確さが大切である。むろん完全な音素表記にこだわる必要はないわけだが、少なくともその言語の音素体系をよく反映するものでなくてはならない。本書は IPA の記号を使って、著者もことわっているように必ずしも音素表記ではないけれどもむしろそれよりも詳しい程度の音声表記がしてあるから、この点、安心して使える辞書である。著者はロンドン大学 SOAS の Lecturer であるが、ロンドン学派の音声学の技術の強さにあらためて感心させられる。

さて、本書は、まず 1949-50 にロンドンで調査したものを1950-1, 1956-7の2回にわたるビルマでの現地調査で補充・再検討した結果にもとずいていて、標準的なビルマ・モン語であるサルウィン東岸の方言を対象としている。見出し語の数は約5,000で決して多くはないけれども、その内容は実に豊富で、品詞別・意味の説明・例文・熟語とその例文・派生語と同義語など関連語彙・綴字・派生語や借用語についてその由来等々がいちいち掲げられている。相当長期間にわたる